

寛容と民主主義の精神

石神 豊

はじめに

本対談は、池田大作SGI（創価学会インタナショナル）会長と、ソフィア大学教授であり、同大学付属スラヴ・ビザンティン研究所の所長を兼務される女性学者、アクシニア・D・ジュロヴァ博士との間で交されたものである。ジュロヴァ博士の専門は、東方キリスト教の文献学、図像学であり、スラヴ語の写本目録など、多くの著作がある。対談の開始からほぼ二十年かけて完成された本書には、冷戦の時代を超えて、ブルガリ

ア民主化への道という歴史の変動が如実に映し出されている。

これまで日本におけるブルガリアへの理解はけっして十分とはいえず、一般には、東欧に属する一つの国という認識しかなかったといえよう。しかし、地理的な距離を越えて両国を結びつけるものに着目することが必要である。それは「文化」という、この人間の営みである。文化は、それぞれが独特であるとともに、普遍的な内容をもっている。文化をになうものは民衆に他ならない。この視点に立つとき、二つの国

にはおそらく想像以上の結びつきが見出されてこよう。本対談が実りあるものとなっているのは、こうした民衆的視点が両対談者の原点にあるからであろう。

いまや新しいミレニアムを迎えて、激動する時代に突入した。私たちは、同時代の問題意識を共有するとともに、新しい時代へのヴィジョンを語り合うべき時にいたった。その意味において、かつてシルクロードの東の終着点であった日本と、同じく西への入口に位置したブルガリアとの間に、新しい時代の精神的シルクロードを架橋せんとする本対談の試みは、きわめて重要であり、かつ時を得たものといえよう。私たちが本書とともに、両国の文化の底流にある精神的共通性を見出しえ、歴史的顧慮によって現代を理解し、さらに文化の核ともいえる宗教について洞察を深めることができるならば、新時代への方向と希望とを共有することができるようになる。

対談では多彩な話題がとりあげられているが、本書評ではつぎの三つのテーマに絞って論じてみたい。それは、（一）「獅子」をめぐる論じられる東西のヒュ

ーマニズム、（二）伝統と近代化の問題、そして（三）宗教をめぐる寛容の問題、である。

一 「獅子」をめぐる東西の

ヒューマニズムについて

対談集は『美しき獅子の魂』とのタイトルをもって、まさしく本対談をリードするシンボルが「獅子」にほかならない。

はじめに池田SGI会長は、古代インドのアショーカ王が、釈尊の初説法の地サルナートに建立した、獅子の柱頭を紹介している。アショーカ王の言葉として、「唯一の真の征服とは、自我の克服であり、ダルマ（法・真理）による人間の心の征服である」という言葉がある。まさに「獅子」とは、この精神の力、人間の内なる力の強靱さを象徴するシンボルである。このことは、仏教の経文中で、釈尊が「獅子王」とうたわれ、その説法が「獅子吼」と呼ばれることと合い呼応しているといえる。

池田SGI会長の仏教的紹介に対して、ジュロヴァ

博士は、「その雄叫びの中に、生命の良き法をそなえた獅子の強さと能力が存在するのです。つまり、獅子はロゴスの力です」との理解を示している。ロゴスとは言論、つまり仏教的に言えば説法であり、獅子とはこの言論、説法のもつパワーを象徴するといえよう。

ギリシャに始まる哲学において、ロゴスとは人間と万物を結びつけるものであった。ヘラクレイトスは、「私にはなくて、ロゴスに聞いて、万物が一つであることを認めるのが、智というものだ」（山本光雄編『初期ギリシャ哲学者断片集』岩波書店）と述べている。そして、ロゴスの力を十分に駆使して、真理発見への方途としたのが対話（ディアロゴス）の名手、ソクラテスであった。ローマ時代のストア派の思想においても、そのコスモポリタンの思考は宇宙的ロゴスに支えられたものであった。以来、学問が、*Logos*（*logos*）と称されるように、学問とは本来、その根底にロゴスの力を内包しているのである。

仏教は仏法ともいわれ、「法（ダルマ）」の立場を鮮明にしている。ダルマはインド的伝統の中で種々の意味

をもつが、仏教はそれを、人間が至高の幸福にいたる道として説かれる真実、宇宙的真理という意義において樹立したのであった。つまり、人間が最高の価値を実現するための、宇宙と通底している法則がダルマである。それは、矮小な世界観を打ち破る精神のポジティブな力といい換えることもできよう。まさに仏教は、執着や無明を打ち破る力強い獅子の力を人間精神こそがもっている、と主張したといつてよい。

ブルガリアでは、十二世紀以来、獅子が旗印として用いられるようになったことである。獅子の印は、古来、諸民族、諸国家の野心と闘争が渦巻くバルカン半島の歴史の中で、ブルガリア人の主体を守り通そうとする意志を示しているという。民族復興を説いた修道僧バイシーの『スラブ・ブルガリア史』（二七六三）の中では、「ブルガリア人たちは王に服従することはなかった。彼らは獅子のように荒々しく、戦いにおいて恐れを知らず、勇猛であった」と述べられている。つまり、不屈の民族精神の象徴が獅子として表象されたのである。

獅子は一般に、勇氣、力、勝利の象徴といえよう。もつとも、たんなる力強さは悪しき力ともなりうる。

しかし、ジュロヴァ博士が、「ブルガリアにおいて、獅子が悪や死のシンボルとして使われた記録は一つもない」と誇らしく述べるように、ブルガリアにおける獅子は、悪なる権力、デモニッシュなものへの抵抗、そして善にもとづく人間的勝利など、よき象徴として一貫して用いられたのであった。

ヒューマニズムが、たんに人間のやさしさ、あたたかさのみを論じるものならば、それは柔弱なものであり、おそらく外なる圧倒的な力によって容易に踏みこじられてしまうことになる。ヒューマニズムが、まさしく「イズム（主義）」としての主張性をもつ意義は、それが非人間的な力に対して、どこまでも戦っているという姿勢をもつところにあると考えるべきである。その点、獅子に象徴されるブルガリアの精神的な自主独立心は、仏法で説く獅子吼に通じるものとみられる。つまり、悪を打ち破り、善を樹立する人間の力である。仏法の獅子のイメージは、「仏や菩薩がさまざまな迫害

に打ち勝って、教えを人々に広めていく姿」である。池田SGI会長は述べている。さらに、内村鑑三が、「日本人としてもっとも勇敢なる日本人」（『代表的日本人』）と評した、鎌倉時代の日蓮こそがそれにあたり、日蓮の著作中でも、自身や弟子たちをしばしば獅子に譬えていることを指摘している。

精神の強靱さは、困難に立ち向かうことによって、はじめて成就するものである。その点、日本においては池田SGI会長が述べているように、軍国主義と戦い牢死した牧口初代会長、その遺志を受け継ぎ戦後日本に精神的復興をはかった戸田第二代会長は、強靱なヒューマニズムの実践者であったといえよう。そして第三代の池田会長自身、獅子の精神をもって諸困難と戦い、日本のみならず世界にそのヒューマニズムを広げたその人である。一方、ブルガリアではどうであったか。ジュロヴァ博士は、「東欧は周期的に困難な時期があり、強靱となってきた」のであり、ブルガリア民衆の強靱さは諸困難を乗り越えてきたことによって形成されたのだという。いま、そうしたブルガリア的精

神の代表として、ジュロヴァ博士がいるとみたい。本対談が繰り広げる東西のヒューマニズムは、この意味において、獅子にイメージされる強靱なヒューマニズムにおいて響きあうのである。

二 伝統と近代化の問題

こうした精神を確認しあった後、対談は歴史の問題に進む。ジュロヴァ博士は「序」の中で、「未来は過去の連続である——これが、この対談で私が提示したいビジョンです」と述べている。未来がいかに描かれようが、過去をふまえない未来はない。また、未来に生かされない過去は過去でもないといえよう。それが歴史のもつ意味である。そして、この未来に生きる過去を「伝統」と呼ぶならば、伝統の正しい継承、発展こそ、現代に生きる者の務めということになる。

ブルガリアにとって、そしてジュロヴァ博士にとって、最大の問題は、ブルガリアの民主化の問題である。冷戦以後、民主化の道を歩むことになったブルガリアは、現在一つの岐路にさしかかっているようにみえる。

否する近代化は受け入れられないということである。

ジュロヴァ博士は述べる。これまでの自由化の流れには、西欧諸国の覇権の下で、東欧の文化的アイデンティティを西側に同化してしまおうとする動きがあった。しかし、それは東欧に不健全な感情を引き起こし、当初はさほど意識されなかった伝統文化を、逆に強く意識させるようになった。そして、西欧的文化も、じつはその歴史的な発生においては、東方起源のものであることに思い至ったとき、新しい精神文化はけっして伝統文化を無視してはありえないということを悟ったという。

文化とは、それなくして人間の日常生活がありえなかったところのものである。つまり、文化的伝統とは本来、民衆が生み出し、育んだものであったわけである。その視点から、ジュロヴァ博士はフォークロア（民間伝承）に注目する。ブルガリアの豊かな民俗音楽をはじめとする民俗芸能は、かつて衰退しようとしていたが、今はふたたび蘇ってきた。それは、民衆の大地に根ざしたもののゆえに、人間同士の直接的なコミュニケ

自由化の波は、商品経済や情報化を中心として、すべての価値を相対化していく。それは西側諸国がとった道である。しかし、ブルガリアにとって、この自由化には伝統の排除という問題がのしかかってくる。そこで、伝統を捨てて近代化に邁進するか、それとも伝統を墨守して近代化を排除するか。それはともに両極端の道であろう。真の民主化の道を思索するジュロヴァ博士の悩みはそこにあった。

一九八一年に池田SGI会長は、ソフィア大学において講演した「東西融合の緑野を求めて」の中で、イワン・ヴァーゾフの著作『軛の下で』を引いて、ブルガリアの民族精神には「若さ」があると述べ、その「若き精神」に新たな人類社会を構築しゆく「カギ」があると感じられてならない、と述べた。ジュロヴァ博士は、この言葉に深い共感をもったようであり、本対談の中で、ブルガリアの歴史的課題について、博士は一つの明確な見解を表明する。それは、西欧型の単純な近代化には多くの問題があるということであり、少なくともブルガリアにおいては、伝統文化の貢献を拒

ーションを可能にし、潤いを与えるものでありうる。

池田SGI会長も、博士の見解に全面的に賛同している。「現代の生き方を伝統文化から切り離して構築すれば、それは底の浅い、根無し草の不安定なものになることは明らかです」と。日本でもまた、明治以降、西欧の物質文明が流入して以来、種々の民俗文化が崩壊し、かつての共同体的意識が喪失されてきたという問題がある。かといって、たんなる「レトロ」は感傷的なものに過ぎない。池田SGI会長はこう述べる。「民衆の大地に根ざしているものは、いったんは駆逐されたかのように見えても、たくましく雑草のように、再び新たな芽を出してくるものです」。そこで、もっとも大事なことは、「日常の生活の視点を大事にすること」であり、ブルガリアにはそうした庶民性が根強くある点を称えている。東洋には、生物と無生物を含む「共生のモチーフ」があり、二元論的対立を超えて、調和を重視する精神がある。この調和的精神は、二国のみならず、近代化と伝統の狭間に悩む諸国にとって、解決のための大きな示唆を与えるものといえよう。

こうして、両者の対話は伝統のもつ意義にまで及び、近代化と伝統の問題に重要な視点を提示する。「民主化」とは、言葉の意義からしても、民衆が主体となることである。それは経済至上でもなく、政治優先でもない。民衆文化の立場を貫くことこそ、真の民主化であることを両者の対話は教えている。

三 宗教と寛容をめぐる

二十一世紀にとって避けられない課題、それは宗教間の争いをどう解決するかという問題である。すでにカトリックでも、一九六〇年代の公会議において、これまでの排他的態度を改め、相互理解の重要さを指摘し、諸宗教間の対話路線が提唱された。しかし、現在の国際紛争をみても、相互理解自体が容易でないことは察せられよう。その背景にあるものは、宗教の原理主義的傾向である。寛容は言葉の上だけで終わるのか。人類的悲劇を避ける真の寛容は、どこに求めるべきものだろうか。

ここでも重要な役割をもつものは、歴史的な反省と、

そこから汲み取るべき人類的英知である。両者の対話は、その視座に立つて、さらに進んでいく。

東西を問わず、古来、国家における宗教の導入は、当然ながら政治的意図をもったものであった。だが、宗教はたんなる政治的意図を超えて、普遍的意義をもちうる。それは宗教が民衆の精神的涵養をすすめてきたという面である。

たとえば日本における仏教の導入は、古代大和政権によってなされたが、この導入によって、それまでの「穢れ」の世界とされた死や死後の世界に対し、来世という觀念の導入によって、一つの希望が与えられたのであった。さらに仏教は、生への深い同情を精神的伝統として広く育んできた。それは、日本の民衆的な文化を育んだ無形文化財ともいえることができる。しかし、国家が民衆の幸福を忘れ、宗教さえも支配の道具としてのみ考えようとするとき、そこに民衆の立場に立つ抵抗運動が生じることは理の当然でもある。民衆の立場に立つかぎり、この抵抗運動は、一方では反権力運動ともなり、他方では宗教自体の改革運動ともなつて

いく。こうした運動が日本の歴史の中にも散見されるが、多くの場合、運動家は政治的権力によって苦吟させられたのであった。しかし、その抵抗精神は立ち消えたのではなく、無意識的ではあっても、日本の民衆の中に深く沈潜していったというべきであろう。

ブルガリアのキリスト教は東方正教会（ブルガリア正教会）に属している。その宗教受容の歴史をみると、そこには政治的な要素があったにせよ、けっして民衆的性格を喪失することはなかったとジュロヴァ博士は述べている。九世紀のキリスト教の公的受容にあつても、それはブルガリア的な受容であつて、ビザンティンの文化や制度そのものを導入することを意味しなかったという。ここで、博士は十世紀の「ボゴミール運動」を詳しく述べている。日本ではあまり知られていないこの運動であるが、学ぶべき宗教運動の歴史であろう。本対談集の「ボゴミール運動の意義」と題する一節は、ブルガリア学者による専門的紹介として、大きな意義をもっているといつて間違いない。

ボゴミール（運動の創始者の名をとっている）運動は中

世ブルガリアにおける宗教改革運動である。それは、実践の面では儀式の簡素化、土地の平等な分配、男女の平等な自由の主張をし、さらに洗礼や聖餐などの秘蹟を否定する運動であつた。彼らは修道院や修道士をもたず、自らの家で祈りをささげ、物質的なものよりも精神的なものに価値をおいたのであつた。こうしたボゴミール派の運動は、後の西欧における宗教改革運動であるカタリ派やワルド派の主張を先取りするものであり、民衆的覚醒運動の先駆的なものだといつてよい。ボゴミール運動が、迫害されながらも、五世紀もの長い間つづいた事実、この運動がブルガリアの民衆的支持を得ていたことを物語っている。

ボゴミール派は、教義的には、神と悪魔、善と悪などの区別を説く二元論に属する。一般に二元論は、宗教的には異端視されることが多いが、じつは倫理的には大きな意義をもっている。それは倫理的刷新運動のエネルギーとなる点である。一神教がともすると権威化し、世俗的な権力と癒着しがちであるのに対し、二元論は、むしろ内面的洞察に向かう。ジュロヴァ博士

は、ボゴミール派の二元論にスラヴ的宗教の特徴をみ、人間に内在する悪に立ち向かうことの重要性がそこにみられると指摘している。人間は常に悪魔的原理の影響下にあり、その誘惑にさらされているが、「しかし同時に人間は、自らの闘争を行い、また悪の力から自らを守るような『自由意志』をもっているとされたのです」と博士は述べている。そして、この内面的洞察にもとづいた批判的精神は、のちにトルストイにもその影響をみることが出来るものである。

このキリスト教導入期の運動にみられる民衆精神は、その後のブルガリアにおいても消えることはなかった。ブルガリアは十四世紀から約四世紀の間、オスマン・トルコの支配の下に置かれ、イスラム教の下にさまざまな苦難がもちこまれた。しかし、十八世紀後半からの民族復興の運動は、やはり古来の民衆的伝統に立つ自立精神の覚醒によって、そのエネルギーが与えられたのであった。

こうした宗教史的検討は、現代における寛容の問題に一つの光を投射する。寛容の問題とはじつは宗教の

本質に関わる問題なのである。池田SGI会長はハンチントンの『文明の衝突』における宗教の意義に触れて、「問題は、二十一世紀に宗教はどんなものでなければならぬかということ」であり、「新しい時代においては、宗教も変わっていかねばならないのです」と述べる。そして人類的課題である、平和や人権、地球の環境問題のためには、諸宗教は「人間」という次元に立つことが求められ、そうした「人間的意識の進歩」に寄与することが宗教の本質的役割でなければならぬと主張している。

特定の文明の普遍主義的主張は、歴史的に形成された民族的アイデンティティを無視するがゆえに、反発を招かざるをえない。ジュロヴァ博士は、西欧文明の普遍主義に対する反発が、現代の宗教的原理主義運動の背景にあると指摘しているが、これは重要な指摘であろう。この観点から、宗教的寛容への道が開かれる気がする。博士は、「私は、寛容という言葉を開放性として理解いたします。つまり、さまざまな道徳や倫理が共存し、人類の生存という基盤の上に統合され、た

んなる消費モデルをこえるのです。このことは、すべての民族文化が正当性をもつということでもあります」と述べている。覇権主義、普遍主義を超える共存の道こそ、寛容の本質だと思われる。

現代世界に求められる宗教的寛容とは、宗教者が、人間・民衆の立場に立つて、ともに人類的課題を考えると同時に、他者に対して開放された精神をもつことであるという、本対談の両者の意見に筆者も賛同したい。これまで地上の諸民族、諸国家が培ってきた諸文明の英知を結集するために、「文明」間の対話がますます重要になっていることは論を待たない。すでにトインビー博士をはじめ、数多くの世界的知者との対話を繰り広げている池田SGI会長の姿に、私たちは寛容の実践を見出すことができる。そして、『美しき獅子の魂』と題されたこの本書自体、寛容こそが、人と人、文化と文化とを結びつける唯一の美しき魂であることを実証しているといえよう。